朝

眞景累ケ淵

近代文芸資料複刻叢書第四集
昭和三十八年　六月十日　発行

朝集
圓全

圓朝全集〈巻の一〉
限定版　各五五〇部　定価千弐百円〒120

校訂編纂者
圓朝會代表者　鈴木行三

発行者　松本富夫

発行所　株式会社　世界文庫
東京都目黒区原町一、三五五番地
電話　東京七一三局九二四四（代表）
振替　東京七八四九八番

圓朝全集　卷の一　目次

口　繪

三遊亭圓朝肖像
櫻川町時代の書翰
「眞景累ケ淵」掲載の時のやまと新聞の豫告（大蘇芳年）

眞景累ケ淵……（挿畫　大蘇芳年）……一

闇夜の梅……（挿畫　大蘇芳年）……四〇一

文七元結……（題詞　圓朝自筆　挿畫　大蘇芳年）……四四五

政談月の鏡……（挿畫　水野年方）……四八一

眞景累ケ淵

一

今日より怪談のお話を申上げまするが、怪談ばなしと申すは近來大きに廢りまして、餘り寄席で致す者もございませんと申すものは、幽靈と云ふものは無い、全く神經病だと云ふことになりましたから、怪談は開化先生方はお嫌ひなさる事でございます。それ故に久しく廢つて居りましたが、今日になつて見ると、却つて古めかしい方が、耳新しい樣に思はれます。これはもとより信じてお聞き遊ばす事ではございませんから、或は流違ひの怪談ばなしがよからうと云ふお勸めにつきまして、名題を眞景累ケ淵と申し、下總國羽生村と申す處の、累の後日のお話でございまするが、これは幽靈が引續いて出まする、氣味のわるいお話でございます。なれども是はその昔、幽靈といふものが有ると私共も存じてをりましたから、何か不意に怪しい物を見ると、おゝ怖い、變な物、ありやア幽靈ぢやアないかと驚きましたが、只今では幽靈がないものと諦めましたから、頓と怖い事はございませ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ん。狐にばかされるといふ事は有る譯のものでないから、神經病、又天狗に攫はれるといふ事も無いからやつぱり神經病と申して、何でも怖いものは皆神經病におつつけてしまひますが、現在開けたえらい方で、幽靈は必ず無いものと定めても、鼻の先へ怪しいものが出ればアッと云つて臀餅をつくのは、やつぱり神經が些と怪しいのでございませう。ところが或る物識の方は、「イヤ〳〵西洋にも幽靈がある、決して無いとは云はれぬ、必ず有るに違ひないと仰しやるから、私共は「ヘエ然うでございますか、幽靈は矢張有りますかなと云ふと、又外の物識の方は、「ナニ決して無い、幽靈なんといふは有る譯のものではないと仰しやるから、「ヘエ左樣でございますか、無いといふ方が本當でげせう、と何方へも寄らず障らず、只云ふなり次第に、無いといへば無い、有るといへば有る、と云つて居れば濟みまするが、極大昔に斷見の論といふが有つて、是は今申す哲學といふ樣なもので、此派の論師の論には、眼に見え無い物は無いに違ひない、何んな物でも眼の前に有る物で無ければ有るとは云はせぬ、假令何んな理論が有つても、眼に見えぬ物は無いに違ひないといふ事を說きました。すると其處へ釋迦が出て、お前の云ふのは間違つてゐる、それに一體無いといふ方が迷つてゐるのだ、と云ひ出したから、益〻分らなくなりまして、「ヘエ、

それでは有るのが無いので、無いのが有るのですか、と云ふと、「イヤ然うでも無い。と云ふので、詰り何方か慥かに分りません。釋迦と云ふいたづら者が世に出て多くの人を迷はす る哉、と申す狂歌も有りまする事で、私共は何方へでも智慧のある方が仰しやる方へ附いて參りまするが、詰り惡い事をせぬ方には幽靈といふ物は決してございませんが、人を殺して物を取るといふやうな惡事をする者には必ず幽靈が有りまする。是が卽ち神經病と云つて、自分の幽靈を脊負つて居るやうな事を致します。例へば彼奴を殺した時に斯ういふ顏付をして睨んだが、若しや己を怨んで居やアしないか、と云ふ事が一つ胸に有つて胸に幽靈をこしらへたら、何を見ても絕えず怪しい姿に見えます。又その執念の深い人は、生きて居ながら幽靈になる事がございます。勿論死んでから出ると定まつてゐるが、私は見た事もございませんが、隨分生きながら出る幽靈がございます。彼の執念深いと申すのは恐しいもので、よく婦人が、嫉妬のために、散し髮で仲人の處へ駈けて行く途中で、巡査に出會しても、少しも巡査が目に入りませんから、突當るはずみに、巡査の顏にかぶり付くやうな事もございます。又金を溜めて大事にすると念が殘るといふ事もあり、金を取る者へ念が取付いたなんといふ事も、よくある話でございます。

只今の事ではありませんが、昔根津の七軒町に皆川宗悅と申す針醫がございまして、この皆川宗悅が、ポツ〳〵と鼠が巣を造るやうに蓄めた金で、高利貸を初めたのが病みつきで、段〴〵少しづゝ溜るに從つていよ〳〵面白くなりますから、大した金ではありませんが、諸方へ高い利息で貸し付けてございます。ところが宗悅は五十の坂を越してから女房に別れ、娘が二人有つて、姉は志賀と申して十九歳、妹は園と申して十七歳でございますから、其二人を樂みに、夜中の寒いのも厭はず療治をしては僅かの金を取つて參り、其中から半分は除けて置いて、少し溜ると是を五兩一分で貸さうといふのが樂みでございます。安永二年十二月二十日の事で、空は雪催しで一體に曇り、日光おろしの風は身に染みて寒い日、すると宗悅は何か考へて居りましたが、宗「姉えや、姉えや。志「あい……もつと火を入れて上げやうかえ。宗「ナニ火はもういゝが、追〴〵押詰るから、小日向の方へ催促に行かうと思ふのだが、又出て行くのはおつくうだから、牛込の方へ行つて由兵衛さんの處へも顏を出したいし、それから小日向のお屋敷へ行つたり四ツ谷へも廻つたりするから、泊り掛で五六軒遣つて來ようと思ふ、牛込は少し面倒で、今から行つちやア遲いから明日行く事にしやうと思ふが、小日向のはずるいから早く行かないとなあ、志「でもお父さん本當に寒い

よ、若し降つて來るといけないから明日早くお出でなさいな。宗「いや然うでない、雪は催して居てもなか〳〵降らぬから、雪催しで些と寒いが、降らぬ中に早く行つて來やう、何を出してくんな、綿の澤山はいつた半纏を、あれを引掛けて然うして奴蛇の目の傘を持つて、傘は紐を付けて斜に脊負つて行くやうにしてくんな、ひよつと降ると困るから、なに頭巾をかぶれば寒くないよ。志「だけれども今日は大層遲いから、宗「いゝえさうでは無い、と云ふと妹のお園が、園「お父さん早く歸つておくれ、本當に寒いから、遲いと心配だから、宗「なに心配はない、お土產を買つて來る。と云つて出ますると、所謂蟲が知らせると云ふのか、宗悅の後影を見送ります。宗悅は前鼻緒のゆるんだ下駄を穿いてガラ〳〵出て參りまして、牛込の懇意の家へ一二軒寄つて、すこし遲くはなりましたが、小日向服部坂上の深見新左衞門と申すお屋敷へ廻つて參ります。この深見新左衞門といふのは、小普請組で、奉公人も少ない、至つて貧乏なお屋敷で、殿樣は毎日御酒ばかりあがつて居るから、疊などは緣がズタ〳〵になつて居り、疊はたゞみばかりでたたは無いやうな譯でございます。宗「お賴み申します〳〵。新「おい誰か取次が有りますぜ、奥方、取次がありますよ。奥「どうれ。と云ふので、奉公人が少ないから奥樣が取次をなさる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

二

奥「おや、よくお出でだ、さア上んな、久しくお出でじなかつたねえ。宗「へエこれは奥様お出向ひで恐れ入ります。奥「さアお上り、丁度殿様もお在宅で、今御酒をあがつてる、さア通りな、燈光を出しても無駄だから手を取らう、さア、宗「これは恐入ります、何か足に引掛りましたから一寸、奥「なにね疊がズタ〳〵になつてるから足に引掛るのだよ……殿様宗悦が、新「いや是は何うも珍らしい、よく來た、誠に久しく逢はなかつたな、この寒いのによく尋ねてくれた。宗「へエ殿様御機嫌好う、誠に其後は御無沙汰を致しましてございます、何うも追〻月迫致しまして、お寒さが強うございますが何もお變りもございませんで、宗悦身に取りまして恐悦に存じます。新「先頃は折角尋ねてくれた處が生憎不在で逢はなかつたが何うも遠いからのう、なか〳〵尋ねるたつて容易でない、よくそれでも心に掛けて尋ねてくれた、餘り寒いから今一人で一杯始めて相手欲しやと思つて居た處、遠慮は入らぬ、別懇の間ださア、宗「へエ有難い事で、家内のお兼が御奉公を致した縁合で、盲人が上りましても、直〻殿様がお逢ひ遊ばして下さると云ふのは、誠に有難いことでございますが、へエ、な

に何う致しまして、奥「宗悦やお茶を此處に置くよ。宗「へエ是は何うも恐れ入ります。新「奥方宗悦が久振で來たから何でも有合で一つ、隨分飲めるから飲まして遣りませう、エ、奥方勘藏は居らぬかえ、エ、ナニ何か一寸、少しは有らう、まア〳〵宗悦此方へ來な、却つて鰐ぐらゐの方が好い、隨分醉ふものだよ、さアずつと側へ來な、奥方頼みます。奥「宗悦ゆるりと、と云ふので、別に奉公人が有りませんから、奥様が臺所で拵へるのでございます。新「宗悦よく來た、さア一つ、宗「へエ是は恐れ入ります、頂戴致します、へエもう…おッと溢れます。新「これは感心、何うもその猪口の中へ指を突込んで加減をはかると云ふのは其處は盲人でも感服なもの、まア宗悦よく來たな、何と心得て來た。宗「へエ何と云つて殿様申し上げるのはお氣の毒でげすが、先年御用達つて置いたあの金子の事でございます、外とは違ひまして、兼が御奉公を致しましたお屋敷の事でございますから、外よりは利分をお廉く致しまして、十五兩一分で御用達つたのは僅か三十金でございますが、あれ切り何とも御沙汰がございませんから、再度參りました所が、何分御不都合の御様子でございますから遠慮致して居るうちに、もう丁度足掛け三年になります、エ誠に今年は不手廻りで融通が惡うございます、へエ餘り延引になりますから、へエ何うか今日は御返金を願ひたく出ましてござ

います、へエ何うか今日は是非半金でも戴きませんでは誠に困りますから、新「そりやア何うもいかん、誠に不都合だがのう、當家も續いて不如意でのう、何うも返したくは心得て居るが、種々その何うも入用が有つて何分差支へるからもうちつと待てえ、宗「殿様え、貴方はいつ上つても都合が惡いから待てと仰しやいますがね、何時上れば御返金になるといふ事を確かり伺ひませんでは困ります、へエ慥かに何時幾日と仰しやいませんでは、私は斯ういふ不自由な身體で根津から小日向まで、杖を引張つて山坂を越して來るのでげすから、只出來ぬとばかり仰しやつては困ります。三年越しになつてもまだ出來ぬと云ふのは、餘り馬鹿々々しい、今日は是非半分でも頂戴して歸らんければ歸られません、何ぼ何でも餘り我儘でげすからなア。新「我儘と云つても返せぬから致し方がない、エヽいくら振らうとしても無い袖は振れぬといふ譬の通りで、返せぬといふものを無理に取らうといふ道理はあるまい、返せなければ如何いたした。宗「返せぬと仰しやるが、人の物を借りて返さぬといふ事はありません、天下の直參の方が盲人の金を借りて居て出來ないから返せぬと仰しやつては甚だ迷惑を致します、そのうへ義理が重なつて居りますから遠慮して催促も致しませんが、大抵四月縛か長くても五月といふ所を、べん〳〵と廉い利で御用達申して置いたので

げすから、へエ何うか今日御返金を願ひます、馬鹿々々しい、幾度來たつて果しが附きませんからなア。新「これ、何だ大聲を致すな、何だ、痩せても枯れても天下の直參が、長らく奉公をした緣合を以て、此通り直々に目通りを許して、盃でも取らすわけだから、少しは遠慮といふ事が無ければならぬ、然るを何だ、餘り馬鹿々々しいとは何ういふ主意を以て斯の如く惡口を申すか、この呆漢め、何だ、無禮の事を申さば切捨てたつてもよい譯だ。宗「やア是は箆棒らしうございます、こりやアきつと承りませう、餘りと云へば馬鹿々々しい、何でげすか、金を借りて置きながら催促に來ると、切捨てゝもよいと仰しやるか、又金が返せぬから斬つて仕舞ふとは、餘り理不盡ぢやアありませんか、いくら旗下でも素町人でも、理に二つは有りません、さア切るなら斬つて見ろ、旗下も犬の糞もあるものか、と宗悅が猛り立つて突つかゝると、此方は元來御酒の上が惡いから、新「ナニ不埒な事を、と立上らうとして、よろける途端に刀掛の刀に手がかゝると、切る氣ではありませんが、無我夢中でスラリと引拔き、新「この糞たはけめが、と浴せかけましたから、肩先深く切込みました。

新左衞門は少しもそれが目に入らぬと見えて、新「何だこのたはけめ、これ此處を何處と心得て居る、天下の直參の宅へ參つて何だ此馬鹿者め、奥方、宗悅が飲醉つて參つて兎や角う申して困るから歸して下さい、よう奥方、と云はれて奥方は少しも御存じございませんから手燭を點けて殿様の處へ行つて見ると、腕は冴え刃物は利し、サツといふ機に肩から乳の邊まで斬込まれて居る死骸を見て、奥方は只べた〳〵〳〵と疊の上にすわつて、奥「殿様、貴方何を遊ばしたのでございます、假令宗悅が何の様な惡い事がありましても別懇な間でございますのに、何でお手打に遊ばした、えゝ殿様、新「ナニたゞ背打に、と云つて、見ると、持つて居る一刀が眞赤に鮮血に染みて居るので、ハツとお驚きになると醉が少し醒めまして、新「奥方心配せんでも宜しい、何も驚く事はありません、宗悅が無禮を云ひ惡口たら〳〵申して捨置き難いから、一打に致したのであるから、其の趣を一寸頭へ屆ければ宜しい。ナニ人を殺してよい事があるものか、とは云ふものゝ、此事が表向になれば家にも障ると思ひますから、自身に宗悅の死骸を油紙に包んで、すつぽり封印を附けて居りまする、何にも知りませんから田舍者の下男が、男「へエ葛籠を買つて參りました。新「何だ、男「へエ只今歸りました。新「ウム三右衞門か、さア此處へ這入れ、三「へエ、お申付の葛籠

を買つて參りましたが何方へ持つて參ります。新「あゝこれ三右衞門、幸ひ貴樣に賴むがな實は貴樣も存じて居る通り、宗悅から少しばかり借りて居る、所が其金の催促に來て、今日は出來ぬと云つたら不埒な惡口を云ふから、捨置き難いによつて一刀兩斷に斬つたのだ。三「へエ、それは何うも驚きました。新「叱つ、何も仔細はない、頭へ屆けさへすれば仔細はない事だが、段〻物入りが續いて居る上に又物入りでは實に迷惑を致す、殊には一時面倒と云ふのは、もう追々月迫致して居ると云ふ譯で、手前は長く正當に勤めてくれたから誠に暇を出すのも厭だけれども、何うか此の死骸を、人知れず、丁度宜しい其葛籠へ入れて何處かへ棄てゝ、然うして貴樣は在處の下總へ歸つてくれよ、三「へエ、誠に、それはまあ困ります。新「困るつたつて、多分に手當を遣りたいが、何うも多分にはないから十金遣らうが、決して口外をしてはならぬぞ、若し口外すると、己の懷から十兩貰つた廉が有るから、貴樣も同罪になるから然う思つて居ろ、萬一この事が漏れたら貴樣の口から漏れたものと思ふから、何處までも草を分けて尋ね出しても手打にせんければならぬ。三「へエ棄てまするのはそれは棄ても致しませうし、又人に知れぬ樣にも致しますが、私は臆病で、佛の入つた葛籠を、一人で脊負つて行くのは氣味が惡うございますから、誰かと差擔ひで、新「萬一に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c